①

令和８年度
地域循環共生圏づくり支援体制構築事業
中間共有会

活動団体の本事業での活動テーマ

『陸の孤島が育む自然と暮らしから生まれた
自然学校を中心とした地域循環共生圏づくり』

活動地域　　：北海道石狩市浜益区
活動団体　　：浜益地域循環共生圏推進協議会
「続ふかんば」

中間支援主体：NPO法人ezorock

1．中間支援主体のありたい姿

■中間支援主体としての本事業を通じた獲得目標とそのための具体的なアクション

・アクションサイクルを、関係人口と共に展開できるモデルづくりを行っていきたい。
　中間支援機能を多様な関係人口が分散して担えるようになる姿を目指したい。
・浜益で長年かけて構築されてきた、専門家ではない若者が地域に関わることで地域の主体性が若者によって引き出されながら、共に学び、成長していくモデルを浜益モデルとして他地域へも広め、視察受入などを行うことができる地域へと広げていきたい。
・写真など古い情報を元に地域住民と関係人口が混ざり、これからの地域を考えるモデルづくりを行い、他地域へ広げていきたい。

■中間支援主体としての本事業終了後の地域づくりへの貢献

地域運営組織や小規模多機能自治といった地域循環共生圏との関連のある動きに対して、地域の中だけでは若者のマンパワーが不足してしまう。北海道において、地域の主体性を引き出しながら、双方向に学びが生まれるような関わりを作れる中間支援主体として発展したい。
そのためのノウハウとして下記の取り組みを地域に関心を寄せる若者と共に進められる技術を身に着けたい。

①「現在」(いま)を知る「集落の教科書」制作ワークショップ→**すでに浜益区にて実施済み・他地域への展開を目指す**
②「過去」を知るワークショップ→**本事業にてモデル作成済み・浜益での更なる実証および他地域への展開を目指す**
　地域の過去の取り組みや資料、写真を元に、昔のまちづくりに若者が注目。取材、収集・整理などを通して、時代背景やその地域の成り立ちに関心を寄せる体験型ワークショップを確立、各地で提供できるように。→若者にとっては地域を知る機会に、地域にとっては、取り組みを通して、その地域を再評価しつつ、今の時代に残す必要のあるものを見つける
③「未来」を考える「地域ビジョンづくり」ワークショップ→**本事業にてモデル作成を目指す**
集落の教科書及び過去を知る資料収集ワークショップによって集められた情報を元に、未来を考える地域ビジョンづくりを進める対話の場づくりを進める

④これらの基礎情報を元に、持続可能な地域を推進するための市民による自主的な取り組みのプロジェクトの立ち上げ
⑤各プロジェクトを推進していくための伴走支援及び活動への若者が参加する機会の創出

2．中間支援主体の支援・取組計画【R8当初計画】

■中間支援主体の1年間の支援目標

- 勉強会の実施や専門人材など必要な外部リソースを繋ぐことで、地域住民が地域づくりの中心を担う地域運営組織設立に寄与している
- 勉強会の実施や専門人材など必要な外部リソースを繋ぐことで、「浜益陸の孤島自然学校」設立と体制基盤強化に寄与している
- 地域外から来る若者の姿がより浸透し、大学との連携プロジェクトが進んでいる

■支援計画

	活動団体の取組における現状と課題（見立て）	課題を解決するために必要と考える手段（打ち手）
①	年々人口減少が進み、あらゆる分野において、慢性的に担い手が不足しており「地域住民」＋「関係人口」の協働を継続的なものにしていく必要がある	さっぽろ圏からの関係人口を送り出すと共に、大学との協働プロジェクトを推進し、主体的な地域外のリソースを活用できる状態を目指す。 またこれまでの受入実績や関係人口による活動実績をまとめた報告書作成を支援する。
②	地域住民のヒグマへの関心は高まり、正しい知識を知り共生しようとする機運は見られるが、出没情報など知識の前提となるデータが不足している。	ヒグマ出没情報の調査を行政と住民が協力して行うことができる状態を目指す。
③	地域運営組織や自然学校など、具体的な活動を見据え新たな組織の設立が目指されてはいるが、特に他地域での事例等の知識が足りず、活動展開の障壁となっている。	勉強会の実施や専門人材など必要な外部リソースを繋ぎ、他地域での事例から、浜益の実情や環境に合わせた組織、、活動計画の作成を支援する。

3．中間支援のふりかえり

■ 3か年を通じた中間支援のふりかえり

地域循環共生圏づくりの過程の支援を通じた「気づき（中間支援が機能したポイント等）」「新たに認識した課題や悩み」「中間支援主体自身の変化（意識や視点、技術等）」「今後の地域づくりの構想や地域外との関係者との連携方策」 等についてご記入ください。

- **未来のビジョンを描く前に地域の歴史や文化を掘り起こし共有することで、地域に根差した文脈のあるビジョン策定が可能になる。**
  地域ビジョンの対話を進める際、突然未来の話から始めるのではなく、「過去の歴史を振り返ること」から始めることが重要ではないかという仮説からスタート。
  →「100年年表ワークショップ」の開発: 世代を超えた継続的な対話機会を創出するため展開。過去から現在に至る地域の歴史を記録し共有しながら、深みのある対話を生み出した。
  →地域ビジョンへの反映: 歴史や世代を超えた対話を通じて、地域ビジョンの中に「歴史や自然が育んだ循環型の暮らしを大切にする」という一節が反映された。
- **対話の場づくりから始まった取り組みが、最終的に「地域自治（RMO）」「環境教育・人材育成（自然学校）」という展開へとつながった**
  地域運営組織（RMO）設立への発展: 中間支援の関わりを通じて、今後の地域自治を担う地域運営組織（RMO）の設立支援へと展開。自治組織の基盤づくりに影響を与えた。
  次世代への継承基盤（自然学校の設置）: 協議会の成果を引き継ぐ形で、環境分野の人材育成を担う「陸の孤島浜益自然学校」の設置

今後も浜益でのプレーヤーであり、中間支援者である役割を全うしつつ、浜益での取組と10年以上NPO法人を運営してきた経験を元に他地域でも中間支援組織として機能することを目指したい。